
BlueWater ~ 惚れ薬 ~

井浦美朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Water ～惚れ薬～

【Nコード】

N0094D

【作者名】

井浦美朗

【あらすじ】

高校の国語教師である梓は、教え子に片思いしている。叶わぬ想いに苦しむ梓は、ある日友人から「惚れ薬」なる青い小瓶を渡される。歳の差がありすぎる生徒との恋の成就をためらう梓は、効果観面というふれこみの惚れ薬を一度は封印するのだが・・・。

「これ、あげるわ。」

理恵の突然の言葉に、ながい・あずさ長井梓は頬杖をつくのをやめた。

薄暗いバーの照明では、隣にいる理恵の真意を読み取ることができない。

だが、理恵の紅い唇は間違いのないセリフを、もう一度繰り返した。

「梓にあげる。効果靨面。彼氏いない暦ウン年なんて吹き飛ばしちゃう代物よ。」

親指ほどの小さな、透き通ったブルーの小瓶。
中の液体は、もう10分の1も残っていない。

理恵曰く、これぞ数多の女性達の間を転々としていた証だという。
「いい？これは都市伝説じゃないの。嘘っぱい広告の商品でもないの。真正正銘の惚れ薬なんだから。私を含めて、この液体を身に付けた女性すべてに彼氏ができているの。それも、結婚に繋がるマジ恋なの。だから次は、梓の番。」

理恵は小瓶を指先で摘むと、念押しのようにテーブルに置き直した。

大理石とガラスが弾け、心地よい音色を奏でる。

しかし、梓は半信半疑の眼差しを拭いきれない。

そんな都合のいい、というより、おまじないめいた物を信じられる年齢ではない。だが、真剣な理恵にそれをストレートにぶつけることはできず、梓は遠回しに言った。

「でも、これでも男ができなかったら、本当に絶望的ってことだよ
ね。」

「そうね。でも、心配は無用よ。」

「そりゃあ、理恵は成功したかもしれないけど、」

「私はこの薬を40歳の先輩からもらったの。40よ？バリキャリ

で恰好いいけど、まともに男とつきあったことのないって人。でも先輩はこの薬で見事！玉の輿よ。昨日、披露宴に行ってきたんだから。その先輩も、友達からもらったんだって。その人も35歳で・・。

「ああ、いい、いい！それはさつきからずっと聞いてるから。ただね、偶然が重なったってこともあるでしょう？」

理恵は明らかに不機嫌そうな眉をしかめた。

「ないわね。こんなに偶然が重なるなんて、ありえない。だから私は、今、恋煩いの只中にいる梓に薬をあげるって言ってるの。それが何？人を嘘つきみたいに！」

「いや、嘘つきっていうわけじゃなくて・・。」

「じゃあ、何？」

理恵は、梓と違って恋にも仕事にも積極的だ。

コンパもパーティも機会さえあれば参加する。そんな理恵が惚れ薬に頼る理由などあったのだろうか。

確かに竹を割ったような性格で、軟弱な男ならビビッて逃げ出してしまいそうだが、理恵の美貌や明るさからすれば、男をつくることに困ったことなどないだろう。

理恵は軽く頬をふくらませて、腕を組んだ。

「いいわよ、信じないならそれでも。何よ。『愛も恋も私には縁がない。』なんてずっと言ってた梓が、やっと恋煩いなんて言うから他の友人を差し置いて譲ろうって思ったのに。」

梓はうつむいて、小さく言った。

「・・ごめん。」

「別に、もういいわよ。これは、別の友達に譲るから。」

理恵はため息をつきながら、小瓶に手を伸ばした。

だが、次の瞬間。

「待って！」

「え？」

理恵の手を遮るように、梓は、思わず小瓶に手を伸ばしていた。

駄目でもともとなら、何もしないよりやった方がいいに決まっている。

大体、恋に悩んでタロットカードだの星占いだの、何の解決にもならないものに頼るより、「実行する」という点においては、この惚れ薬の方が断然優れている。

いつも悩みに悩んで、何も実行せずに、自分の心の中だけで結論付けていたから駄目なのだ。

相手の一挙一動に一喜一憂して、独り相撲で大騒ぎして、泣いて落ち込んで、「駄目だ」と言って諦める・・・そんな恋愛パターンに飽き飽きしていた。

気付いたら、ぱったりと恋愛には縁がなくなっていた。

どんなに相性がいいと思える人でも、どんなにタイプの人に出会っても、何も感じない。人の心とは、例え自分の意思でさえ、どうにもできない。

心が動かないものは、動かない。
それが。

つい最近、久々に心が動いた。

石のように固まっていた心が、突然動き出した。

何にも反応しなかった心を揺り動かすなんて。

忘れていた感覚を、こんなにも急速に目覚めさせるなんて。

つい先月までは何とも思っていなかった相手に、こんな気持ちを呼び覚まされるなんて。

もう、

次は本当にないかもしれない。

だから、動いてみようか。

自分から、自分の中だけで完結させない物語を、今回こそ作ってみようか――

梓は、テーブルの上で拳を握り締めた。

「理恵、お願い。その薬・・・私に譲って。」

家に戻り、梓はテーブルの中央に小瓶を置いてみた。

シックなダークブルーの店内では、あんなに怪しげな光を放っていた小瓶が、平凡な家庭の中では、玩具のように安っぽく見える。使い方は至って簡単。香水のように手首に付けて、好きな相手に会うだけ。

（これは・・・ヒトフェロモンっていうやつなのかなあ・・・？）
テーブルに頬をくっつけて、小瓶の中身を凝視する。

（本当に理恵の言うとおりだったら・・・。）
梓だって、信じたい気持ちで一杯だ。しかしだからこそ、慎重にならずにられない。

だが、梓が惚れ薬の使用に積極的になれない理由は、本当は別のところにあった。

この惚れ薬なるものが本物かどうか、よりもずっと重大なこと。それは、梓がこの恋の成就をためらっていることにある。

梓は、高校の国語教師である。

そして今回の恋の相手は、こともあるうに教え子である。

『教師が生徒に手を出したら、同意不同意に関わらず、懲戒免職』
そういう通達が、最近しょっちゅう出回ってくると思うのは、被害妄想か。

梓は今まで生徒から告白されても、それを「当然」のごとく断ってきた。間違っても「Yes」と言っではいけないのだから、「No」といい続けるしかない。若い高校生は一度や二度では諦めないしつこさを持っていたが、とにかく梓は逃げ続けた。後で冷静になると「私は酷い女かもしれない。」と思うほど、こっぴどく振っていたものだった。少なくとも、梓から生徒に迫ったことは断じてないし、許されないことだと、いつも心に言い聞かせていた。理性が先にたつてか、生徒に対して興味を持つことなど一度としてなかった。

それが、どうだ。

ときめきつて何だっけ？と思うほどご無沙汰だった感情が、こんなに容易く舞い降りてくるなんて。

それは、胸の奥の臓器という臓器を締め付ける苦しさだった。

ほんの些細なできごとに気持ちちが掻き乱され、立派に片想いが成立している。

何もないのに涙できるなら、本物だ。

教師という立場を利用して近づくことは簡単である。

他の生徒から「ひいき」と思われない程度をわきまえる術も持っている。

だが、梓の思いに相手が応えても、その先に何があるというのだろうか。

デートするのか？

結婚するのか？

まさか！

二人で楽しい時間を過ごしたいとも思わない。

向こうから、好意以上のものをもらいたいとは思わない。

ただ、嘘をつけないほどの想いが梓を支配していて、その切なさを解消したいだけなのだ。

（駄目だ。やっぱり・・・使っていいわけがない。）

梓は抱えた膝に額を埋めて、深く溜息をついた。

今回は、随分容易く物語が完結した。

誘惑に負けて思わず手を出してみたが、それは、誤りだった。

自分がどうすべきか考え、分をわきまえれば、簡単に解決する話だったのだ。

次の日、梓は小瓶をスーツのポケットに入れて出勤した。

今夜もう一度理恵に会って返そうと思ったのだが、鞆の奥に入れてすっかり中身を溢したり瓶を割ったらまずいと思い、考えた挙句がポケットという結論だ。

梓の片想いの相手の名は栗田悠^{くりた・ゆう}。高3。

今日、梓が悠と顔を合わせる可能性は薄い。

担当する授業は週に1回、1時間の古文演習だけ。

広い校舎内ですれ違う確率は10パーセントにも満たない。

（そうよ。初めから、こんなものなのよ。）

だが、タイミングがいいのか悪いのか、事は起こった。

始業寸前、慌ただしい職員室に「彼」は駆け込んできた。

梓の席は、出入り口のすぐ近く。

「先生！国語の辞書、貸してくれませんか！？」

ポケットの中の小瓶の液体が、小さく揺れた気がした。

国語科の教師陣の中では、梓は一番若い。そのせいか、生徒からは「先生」というより「年の離れたお姉ちゃん」くらいの存在でしかないらしい。その分、気楽なのだろう。モノを借りに来たり、頼みごとをしにくる生徒は珍しくない。そして悠も、その一人に過ぎない。

梓は、自分の所有する辞書を本棚から掴み、悠に渡した。

「どうぞ。さあ、早く教室に行きなさい。すぐにベルが鳴るわよ。」

「ありがとうございます！」

廊下を走り去る後姿を見送っていると、悠の担任から声をかけられた。

「ほんつとに栗田は3年になっても変わりませんね。忘れ物、宿題未提出の常習ですよ。」

梓は、軽く苦笑した。

「本当に。担任の先生も大変ですね。」

「学校一厳しい長井先生の古典の単位を、去年よく取りましたよ。」

「さすがの栗田君も怖れてくれたみたいで、私の宿題は全部提出してくれたんですよ。」

「長井先生のことだけは、好きなんですよ。他の教科はからっきしで、今だって卒業できるか冷や冷やなんですから。」

ドキリとした。

――長井先生のことだけは好きなんですよ――

何気ない一言だったのだろうが、梓の胸には大変な衝撃だった。もちろん、その裏側に何も無いことはわかっている。

だが、心が温まってくのは誤魔化しようがない。

（だから、これがまずいんだってば。）

冷静になれば、わかることだ。

もし、梓が男で、相手が女生徒ならば、少しは可能性があるかもしれない。

だが、その逆はまずありえない。

もし悠と梓に何かあったとして、それを悠の両親が知った場合、絶対卒倒する。世の中では、「いい年したおばさんが、何をトチ狂ったのか。」と言われるだけの歳の差だ。

（そうよ。私の気持ちを知ったら、『気持ち悪い』と言われる可能性大なのよ。私が教師でなかったら、街中で出会ったって絶対に100パーセント何も起こらない間柄なのよ。会社で勘違いした上司が気軽に部下の女子社員を誘ってOKがもらえられているのと、私は同レベルなのよ。）

そう考えると、一気に落ち込んだ。

自分が変態のようにさえ感じてくる。

（惚れ薬どころの問題じゃなかったんだ。）

『問題外』だった。

梓の胸は、恋よりも失望で苦しくなっていた。

授業が終わっても、放課後になっても、悠は辞書を返しに来なかった。

（忘れてるのかなあ。それとも、どうでもいいと思ってるのか・・・）

だが、そこまでいい加減な男子ではない、と信じてはいる。厳しいサッカー部で、この夏までみっちり鍛えられ、耐えてきただけの礼儀や秩序は持っている。と、思う。そうでなければ、いくら何で

も惚れたりしない。

ぼんやりとして、顧問をしている手芸部の活動の様子を見に行き、1時間ほどして再び職員室に戻ってきた。

と、その机上には辞書が返却されていた。

「あ、ちよつと前に栗田君が来たんですよ。長井先生をずっと探してたみたいでしたけど。」

背中合わせに座っている若い女性教師が、そう教えてくれた。彼女は生徒達と最も年齢が近く美人のため、特に男子生徒から人気がある。それだけに、梓は率直な嫉妬を感じた。

「・・・そうですか。」

目だけで微笑んでみせたが、お礼を言う気にはなれなかった。

（ああ・・・、会える機会を無駄にしてしまった。）

落胆しながらも、次の瞬間にハツとして首を振る。

（そうだ。私の中では、もう完結していたんだった。）

と、その時、鞆の中の携帯が振動した。

理恵からのメールだ。

『7時に丸の内。いつもの場所で。』

梓が「会いたい。」とメールを送信した返事だ。理恵にしたら、惚れ薬の効き目を報告してくれるとも思っているのだろう。

（・・・正直に言ったら、怒るだろうなあ・・・）

梓の不安は的中した。

会社帰りのOLだらけのカフェの一角で、理恵は大声を張り上げた。

「あんたねえ！世の凡ての女性が泣いて欲しがる薬を、どうして躊躇うの！？信じらんない！」

梓は、すべてを正直に打ち明けた。

それが、理恵に対する自分自身の責任だと思っからだ。

しかし、理恵の返事は思いがけないものだった。

「・・・だから、何よ。」

「え・・・？」

「相手が教え子で、何がいけないのよ。好きなんでしょう？ いいじゃない。」

梓は、大きい理恵の声を抑え込むように、身を乗り出して小さい声でささやいた。

「何がいいのよ？ 手を出したらクビよ、クビ！」

「それは、行くところまで行っちゃったでしょう？ キスぐらいまでならいいんじゃないの？」

「！！・・・それはっ！」

「いいじゃない、トップシークレットの恋よ。スリル満点！」

刺激を求める理恵にとって、梓の悩みはうってつけの餌だったのか。

梓は溜息混じりに首を振った。

「私が言いたいのは、・・・この恋に出口がないってことよ。」

「出口？」

「そう。絶対に別れが待っているのよ。」

「当たり前じゃない。例えば一生のうち10人の男と付き合った場合、何があっても9人とは別れるのよ。下手すりゃ10人全員と。」

恋愛なんてそんなものじゃない？ それを怖れてたら、一生、誰とも付き合えないわよ？」

「・・・傷つくわ。私が私欲を満たすためにこの薬を使ったら、私の勝手で、彼を傷つけることになるのよ。それが、できないって言うてるの。」

理恵はマスカラで整えられた長い睫毛を伏せがちにして、指を組んだ。

「相手は若いのよ。梓と一時楽しい思いをして、別れるとき辛いかもしれないけど、どうせすぐに忘れるわ。それに、もし、その彼が梓の運命の相手だったらどうするの？ ここで何もしないでいて、大事な相手を逃がしてしまうってこともあるのよ？」

「・・・ありえないわ。」

「歳の差が、ありすぎるから？」

「そうよ。生きている時代が違うわ。生まれた時代が、違うのよ。それはどうにもならない。」

「彼が『気にしない』って言っても？」

「私が気にするわよ。大体、彼の両親が卒倒するわよ。私は少年Aをたぶらかした性悪女で、いつつも人目を気にして卑屈になって生きていくのよ。」

理恵の茶色い前髪の間から、寂しげな瞳が覗いた。

「まあ、想像できない結末ではないわね。」

「・・・そうよ。学校の中ではいつも妄想以上の現実を突きつけられてるし。」

「妄想以上の現実？」

「・・・この間、文化祭があつたのよ。その時、偶然話があつて校内をしばらく一緒に歩いていたの。・・・その間中、周りの女子の無数の視線を感じまくるの。歩いてる人も皆、注目して振り向くのよ。彼は背が高くて格好良く、どんなにモテルか、あの時初めて実感した。女の子達にとったら私は、邪魔なおばさんだったのだと思う。」

「・・・なるほど。梓の片想いの彼は筋金入りの美形なわけだ。」

「その後も、資料を貸すために彼に職員室までついてきてもらったのね。その途中、他校の女子に声かけられてた。『一緒に写真とつてくれませんか。』って。何か言い訳して断ってる彼を尻目に、私、どんだん先を歩いていった。そして後から急いで追いついてきた彼に言ったの、『大丈夫なの？』って。彼は『大丈夫です。』って答えて・・・。」

梓の唇が、僅かに震えた。

「私、その時すごい優越感を覚えたのよ。彼は教師である私に礼を尽くしていただけたのに、とにかく、その時は女子高生全員に勝った気分だった。そういう勘違いしてしまう自分が嫌なの。まずいと思うているの。だから自分に言い聞かせてるの。私と彼が並んで歩

いてる様子は、傍から見たら親子にしか見えない、って!」

梓はポケットから小瓶を取り出し、テーブルの上に置いた。

「だから、返す。理恵には本当、申し訳ないことした。ごめん。」

理恵はしばらく小瓶を見つめていたが、やがて、溜息混じりに呟いた。

「もし純粹に、その彼が梓のことを好きだった場合、どうするの?」

「ありえないもん。そんなの。」

「たとえ話でいいわよ。・・・どうするの?」

梓は肩の力を抜いて、失笑した。

「どうもしないわ。『ありがとう』で、終わりよ。」

「可哀想じゃない?」

「そう?・・・後になって苦い思いして別れるよりいいわよ。」

「梓の言ってること、変。」

「変?」

「惚れ薬を使わないのは、出口のない恋だから、自分勝手にまきこみたくないつて言うけど、薬とは関係なく彼が梓に惚れても、結局梓は彼の気持ちをないがしろにするんじゃない?」

「じゃあ、どうすればいいの!? 私にできることはただ一つ。今までと同じで、生徒に迫られてもひたすら断る。私のほうからは絶対に迫らない。それだけなのよ。」

「それは、教師と生徒の関係だから?じゃあ、卒業後に彼が告白してきたら、断らないわけね?」

「・・・断るわよ。絶対に超えられない歳の差があるから。でもそれは、杞憂に過ぎないから・・・大丈夫よ。」

理恵は梓の瞳が潤んでいるのを察知し、優しい口調になった。

「少しの間両思いになって、楽しい思い出作るってのは、駄目なの?」

「・・・駄目よ、・・・駄目。」

梓の落胆した様子を見た理恵は、惚れ薬の入った小瓶をもう一度、梓の手に握らせた。

「じゃあ、この恋でなくてもいいよ。次の恋で使えばいい。いつか絶対使いたくなる相手に出会うと思うから、それまでとっておきなよ。効き目がなくなる期限はないと思うから。」

「でも・・・。」

「もう、他に行く当てのない薬だもの。梓がずっと持っていていいよ。それで、使いたくなったら使えばいいじゃない。・・・ね？」

梓は、下唇を噛み締めながら、小さく頷いた。

それは、この淡い想いを一日もはやく閉じこめようという、切ない決意でもあった。

忘れようと思ってすぐ忘れられるなら、こんなに苦勞はしない。胸の奥をトクンと締め付ける痛みが、少しずつ和いでいくのを待つしかないのだ。

だが、一方で「勿体ない」という気持ちもある。

恋に落ちるなんて、残念ながら人生の中でそうそう何度もあるものではない。

無いときは、徹底的に無い。

落ちたくても、自分の意思で落ちることはできない。

数秒おきの痛みを噛み締めるように固く瞼を閉じる夜は、まだ続くだろう。

今はまだ、そんな夜を失うことが惜しい。

変わり映えしない日常も、小さな恋心一つで大きく変化する。

ただの1日も、「悠がいる1日」ということで、価値ある1日になる。

しかし、恋愛が生きる支えになっていた頃とは違う。恋愛に気持ちすべてを傾けてしまうほどの若さは無い。だからこそ、冷静と熱情の狭間で揺れ続けるのだ。

悠を想ったびに、胸の奥の名も知らぬ臓器がクツと締め付けられ

る。

深い吐息を繰り返し、その苦さを少しずつ磨り潰して、痕跡を失くしていく。

閉じた瞳の内側から湧き上がる熱を外に出せれば、きっと気持ちも冷めていく。

なのに、それが躊躇われる。

泣くほどの気持ちがあるのか。

泣くほどの真剣さを持つことができているのか。

そうではない。

躊躇うのは、思いの存在すら許されないことを、理性が告げているから。

気付いた瞬間に終わりを迎える思い。

風にのせることも、

雨に溶かすことも、

夜に埋めてしまうことさえもできない。

決して報われず、

決して届かず、

決して未来を描けない。

それが、この恋の現実なのだ。

今日も、悠に会えなかった。

大きい校舎ではないのに、すれ違うこともできない。

1週間のうち、会えるのは多くて3回。授業も入れて、3回が限界だ。

悠がいそうな経路をうつづけばいいのかもしれないが、梓は仕事
中の身で、そんな自由な時間はとれない。

最近、電車の窓から、悠の最寄駅を意識して見るようになった。

悠の最寄り駅は、各駅停車しか停まらない。一方、梓の最寄は快速が停まる。

夏が来る前、偶然帰りが一緒になったことがある。

同じホームで電車を待っていたが、悠は一足先に来た各駅停車に乗っていった。快速に乗っても途中で各駅に乗り換えねばならないから、多少時間はかかっても、乗り換え無しで帰りたいと言う。梓は手を振って悠を見送り、数分後の快速を待った。

あの頃は悠のことを全く意識していなかったため、何とも感じていなかった。

快速電車は文字通り「快適な速さ」だった。

だが今の梓にとって、快速は速すぎる。

梓の動体視力では、駅名の看板を読み取ることさえできないほど、あつという間に通り過ぎてしまう。だが、この駅を毎日悠が利用し、眺めている景色だと思つと、それだけで胸が苦しくなる。

駅周辺のコンビニの明るさだけが、かろうじて瞼の裏に残った。

この駅だけ、ゆっくり通り過ぎてくれないだろうか。

ホームの掲示板を、出口に向かう階段の降り口を、もっとじっくり見ていたい。

悠が毎日見ているものを、自分も、よく見ていたい。

電車だけではない。

時間の流れも、もっと、遅くならないだろうか。

悠が卒業するまでの数ヶ月が、もっと、もっと緩やかに流れていかないだろうか。

歳を経ることに加速を増していく時間の流れを、止めることはできないだろうか。

今の時間が、愛おしい。

恋する時間を、心の奥深くで抱きしめていたい。

駅から自宅までの徒歩の道のりは、もっと苦しい。

夜の暗闇に浮かぶ街頭と信号の色を辿っていくと、だんだん切なくなっていく。

悠を想って、泣きたくなる。

どうして、こんな出会いをしたのか。

どうして自分は教師で、相手は生徒なのか。

どうして自分と悠には、絶対に越えられないほどの歳の差があるのか。

どうして悠なのか。

どうしてこの想いを、もっと可能性のある同年代の男性に対して抱けなかったか。

理由などないから、

答えなどないから、

想いはただ、波のように虚しく繰り返し打ち寄せる。

そんな中、梓は再び悠と接触する機会を持った。

悠は、成績が良い方ではない。特に梓が担当する古典は苦手で、小テストも平均以下ばかりが続く。受験を控えたこの時期には致命的だ。そこで梓は放課後、成績不振者を集めて補習を行うことにした。別に、悠と接触する機会を増やそうという下心があったわけではない。だが、何も感じないといえば嘘になる。

補習は、講義の後に課題を出し、梓のチェックを受けて合格点に達した者から終了になる。

悠が、最後の一人だった。

教卓と後部座席という離れた距離で、梓は胸の奥の鈍痛に耐えた。だが、そんな梓の思いを 打ち消すような悠の異変に気付いた。

悠は、時折激しい咳をする。しばらくの沈黙は咳を耐えているだけであって、相当辛そうだった。

10分ほど見守っていた梓は、やがて言った。

「栗田君。つらいなら、今日は帰っていいですよ。」

だが、悠は首を振った。

「大丈夫です。風邪の治りかけなんで。」

「・・・そう。」

机に向かう悠のペンは遅々として進まない。だが、咳は止まる気配を見せない。

夕日に染まりかけた放課後の教室。

部活動で賑わう校庭や体育館とは対称的に、静まり返っている。

そこに鳴り響くから、悠の咳はことさら辛く聞こえる。

梓は、どうしようかと思案した。

悠は「やる。」と言った以上、最後までやるだろう。梓が妥協したら、かえって腑に落ちない表情を浮かべるだろう。

右の人差し指を左の指でなぞりながら、梓は落ち着かない唇を持て余していた。

一人で、万全ではない体調で、最後まで残っている悠に、せめて飲み物を差し入れたいと考えたのだ。だが、それを良しとするかで迷っている。

相手が悠でなければ、多分迷っていない。

悠だから、変に意識してしまっている。

立とうとして足を伸ばし、しかしすぐに引っ込めてしまう。

相手が悠だからこそ、考えてしまう。

例えば、「いらない。」と拒絶されたら、とか。

そんなことになったら、それこそ自分の覆いきれない下心を見透かされたような恥ずかしさで、いたたまれなくなる。

（うつん、こんなこと考えること事態、駄目なのよ。忘れるって決めたんだし、どうせ玉砕するんだし、他の生徒なら平気でやることなんだから、躊躇うことないって。）

梓は一人で納得し、意を決して教室を出ると、自販機で冷たい飲み物を買ってきた。

そして。

「どうぞ。」

差し出されたペットボトル越しに梓を見上げた悠の頬が、柔らかくほころんだ。

「ありがとうございます。」

悠は、風邪で火照った額に冷えたペットボトルを押し付け、瞼を閉じた。

梓は安堵の深い吐息を漏らし、そして、小さく微笑んだ。

緊張で高鳴っていた胸が、まだ落ち着かない。

渡して良かった、と思う。

もし躊躇したまま何もなかったら、多分後々まで後悔しただろう。

甘い出来事。

だが、時間が経てば、きっと苦くなる。

瞼の裏の熱さは、やがて冷えて、悲しみになる。

でも、今は。

今くらいは、この時間に酔っていたい。

その日の帰り道、梓は初めて各駅停車の電車に乗った。

重症かもしれない。

悠に直接会っているときよりも、想うときの方がずっと苦しい。

広告に刷られた駅の名前にまで反応するなんて、完全にいかれている。

後ろめたさを抱えながら、息を詰めて車両の片隅に立つ。

やがて、悠の最寄駅に到着した。

無論、そこに悠がいるわけではない。

見知らぬ住人達が、まばらにホームへ降りていくだけだ。

梓は、唇を噛んだ。

何てことだ。

これでは、中学生の初恋と変わらない。

そう。

いくら歳を重ねても、いくつの恋を経験しても、片想いの心は、全然成長していない。

梓は、今一度痛感した。

悠と接触できる時間も、回数も、もう指折り数えるしかないのだということ。

悠の卒業を、拍手で送り出す一教員のまま、終えるしかないのだということ。

それでいいのか？

こんな切ない想いは、もう、二度と抱けないかもしれない。

人生はたった一度きりで、恋心を抱ける歳にもいつか限界が来る。今できる精一杯のことをすべきではないのか。

卒業までのたった数ヶ月を、もっと大事に有効に送るべきではないのか。

悠が卒業した後、電車の窓越しにあのホームを見つめても絶対に後悔しないか。

今、悠に想い人がいるのかどうかはわからない。

休み時間や授業で見る限りでは、いつも男友達数人とつるんでいる。特定の女子という場面は見たことがない。だが、悠のプライベートを殆ど知らない梓にとって、何も確信のもてる要素はない。それが逆に、半端な欲望を呼び覚ます。

必ず終わりが来ることはわかっている。

教師と生徒という身分を越えることが可能でも、歳の差を越えることは不可能だということもわかっている。

そして、悠が自分を女として相手にするわけがないことも、わかっている。

これだけ不利な条件が揃っていて、あと、何を噛み締めればいいのか。

想うたびに、

想うごとに増していく苦しさを、

本当にいつか、磨り潰しきれなのか。

すべてが思い出に変わった頃、

一体、何を思っただろうか。

帰宅した梓は、机の奥に仕舞いこんでいた青い小瓶を再び手にとった。

この先、この惚れ薬を使いたくなる相手が現れる保障など、どこにもない。

残っている量は1回分。

最初で最後の大勝負だ。

もちろん、結婚なんて考えてない。

一緒にどこかへ行きたいなんて贅沢は言わない。

ただ。

ただ1度だけ、

体温が触れ合う1センチ手前まで近づくことを、彼の側から望んで欲しい。

それだけだ。

惚れ薬の効果が、二人を一度結び付けたとしても、二人の人生が卒業を境に分かれていくことは、百も承知している。

だがその別れは、無理やり引き離されるのではなく、当然の成り行きとして受け入れられる別れにならないか。

その時だけは、傷つくかもしれない。

だが、友人の理恵が言ったように、きっと悠はすぐに忘れてしまう。

新しい環境と、新しい仲間と、新しい生活にのみこまれ、梓のこなど、いつの間にか思い出の中からも消去されてしまうだろう。

梓は息を吞んで、小瓶を凝視し続けた。

惚れ薬を使つてでも、叶えたいか。

この先、今よりも使いたい出会いが生まれても、その時、後悔しないか。

別れが間近に、確実に迫っていることを承知しながら、それでもこの恋の儚い成就を望むのか。

小瓶を両手で握り締め、梓は祈るように額を覆った。
決断は、自分で下すしかない。
自分の一度きりの人生を、どうするか。
どうすべきか、ではなく、どうしたいか。
いつも、願望より義務や理性を優先させてきた梓にとって、それは非常に難しい選択だった。

校舎をさまよう視線は、いつも悠を探している。
12月に入り、いよいよカウントダウンが始まった。
授業は1月末で終わる。
残すは登校日と、そして卒業式だけだ。
梓は最近、いつもポケットに小瓶を入れていた。
心が決まって、チャンスが到来したら、いつでも使えるように。
しかし、構えているときほどチャンスは訪れない。
肩透かしにあうような、そんな日々が続く。
高いヒールの靴を履くようになった。
自分に一番似合う服を、時間をかけて選ぶようになった。
口紅の色を考えるようになった。
だが、そんな変化も、悠の視線を奪うにはお粗末すぎたのかもしれない。

いや、そんなことを考える自体、図々しいのかもしれない。
高校生の悠にとって、梓は女ではない。
教師の一人であって、それ以上の何者でもない。
恋の成就を願って努力するとかしないとか、そんな次元にはないのだ。

わかっていたはずではないのか。
淡い期待さえも、抱いてはいけないことを。
(こんなにも、可能性がゼロに等しいなら・・・)
本当に効果がある惚れ薬でも、ほんの僅かに事態が好転するだけ

ではないだろうか。

向こうから、今までより頻繁に話しかけてくれるとか、会う機会が増えるとか、そんな、偶然の重なりかおまじないの成果かわからない程度の「いいこと」が起こる程度なのではないか。

午後の昇降口で、悠を見つけた。

男女混ざった数人の友人達と車座になって、楽しそうに会話をしていた。

悠は梓に気づくと、「こんにちは。」といつもどおり挨拶した。つられて、周りの生徒たちも挨拶を繰り返す。

梓は会釈をしてその場を跡にしながら、足元を見つめた。

あの輪の中には、絶対に入れないことを痛感する。

そしてあの輪の中こそが、悠のいるべき世界なのだということを思い知る。

努力でどうすることもできないし、どうにかなることではない。

あらゆる障害を打ち壊すような強烈な運命でも存在しない限りは、決してどうにもならないだろう。

それならば。

梓は、意を決した。

明日の授業の最後に、惚れ薬を使う。

手首に振りかけ、悠を呼びとめ、さりげない会話をする。

それで決まりだ。

決意した途端に、心臓が高鳴った。

この薬が、本当の本当に、すごい効き目があったら・・・？

―― いい？これは、都市伝説じゃないの。嘘っぽい広告の商品でもないの。真正正銘の惚れ薬なんだから。私を含めて、この液体を身に付けた女性すべてに彼氏ができているの。それも、結婚に繋がるマジ恋なの――

理恵の言葉が脳裏を何度も木霊する。

だが、そんなすごいことまでを期待はしない。

ただ、ほんの少しの夢を現実に近づけたいだけだ。

それだけだ。

金曜の7時間目。

選択者20名の古文演習。

梓は入試問題の抜粋を解かせながら、始終落ち着かなかつた。

授業中である今は余計なことを考えてはいけなさと何度も自分に言い聞かせるが、そうもいかない。

何せ、今日が人生最大の大勝負の日になるのかもしれないのだから。

授業の後半、問題の解説をしながら、梓の心は急いでいた。そのためか、適切さを欠いた説明をしてしまい、生徒から再度説明を求められてしまった。

「ごめんなさい、もう一度問3のところを説明します。この活用形は……。」

焦れば焦るほど、時間はどんどん過ぎていく。

終業のベルが鳴った。

梓は、ハッとして悠を呼びとめようとした。

しかし。

「先生、ここの問題の意味がよくわからないんですけど。」

数人の女生徒に囲まれてしまったのである。

当然、断れるわけがない。

梓は丁寧な、しかし急いで質問に答えた。

気付いたときには5分が経過し、悠の姿は影も形も見当たらなかった。

梓は、思わず走り出していた。

もしかしたら、まだその辺にいるかもしれない。

また、次のチャンスを一週間待つのには辛すぎる。

抱えすぎた胸の痛みが、破裂しそうなほどに腫れている。

帰宅する生徒の波をよけながら、

部活に向かう生徒の横をすり抜けながら、梓は悠を探し続けた。

もう、帰ってしまっただろうか。

予備校に通っていると言っていた。

帰宅を急いでいたかもしれない。

息が上がって、身体が熱くなってきた。

だが、梓は諦めることなく、もう一度廊下をたどることにした。と、そのとき。

「あっ！」

振り向きざまに、走ってきた生徒と正面からぶつかった。

相手は180cmはある、男子生徒だ。

160cm足らずの梓は、勢いで吹っ飛ばされてしまう。

「あ、すみません！」

男子生徒も急いでいるらしく、床に倒れた梓を助けようとせず、すぐに去っていった。

「・・・っ痛・・・」

高いヒールで足をひねったらしい。

が、次の瞬間、梓を震撼させたものはそんな痛さではなかった。

「・・・!!!」

声にならない叫びが、喉の奥で悲鳴をあげた。

小瓶が！

惚れ薬の入った青い小瓶が、

ポケットから飛び出し、床の上で割れていたのである。

覆うように上から残骸を眺めながら、梓は掻き篂るように両手を床についた。

粉々に砕け散った青い小瓶の欠片は、もう、青い色を留めてはい

なかった。

一つ一つが、ただの透明なガラスにしか見えない。中の微量な液体は、散った痕跡さえ残していない。

ただ、一番大きな破片の裏側に、ほんの少し、水滴のようにへばり付いているだけだ。

脳が痺れるような感覚で呆然とする。

いつも青いガラス越しに見つめていた惚れ薬の色は、一体、何色だったのだろう。

惚れ薬がもたらそうとしていた未来は、一体、どんなものだったのだろう。

指にささったら抜けなくなるような小さな欠片を、梓はその場に屈み込んで、ゆっくりと拾い始めた。

心の中は、不思議と凧いでいた。

悲しくはない。

諦め、というよりも、こうなつて当然という気持ちになつていた。自分の身勝手な思いに対する報いだと思つた。

白い手のひらに大方の破片が集まつた頃だつた。

「どうしたんですか？」

頭上からの声に、ドキリとした。

だが、大したことなど何もなかったかのように、梓はスッと立ち上がった。

「・・・ちょっと、割っちゃつて。」

そう言つて、左手を差し出して見せた。

「ガラス、ですね。」

「うん・・・。」

こういう場合、どうなるのだろう。

殆ど無くなつてしまつた惚れ薬の残骸が今、二人の間に残されている。

だが、梓はもう、何も期待していないし、何をしようとも思わなかった。

小瓶が砕けたときに、梓の恋も微塵に砕け散ってしまっていたようだった。

「お手伝いできることは、ありますか。」

「ううん、もう大丈夫。・・・ありがとう。」

梓は、悠の顔をまともに見ることができなかった。

悠がその場から離れても、梓はその背を追うことはしなかった。だが、次の瞬間、梓は咄嗟にその場から駆け出した。

独りになるところへ、行きたかった。

堰を切ったように、熱い想いがこみ上げてくる。

ビニル床を蹴り上げるパンプスの音を聞きながら、梓は思った。

知り合ってから3年、一体何をしてきたのだろう？

3年も授業を担当しながら、どうして平気でいられたのだろう？

話しかけられるたびに、どうしてもっと、きちんと返事をしなかつたのだろうか？

どうして！

からかいの言葉に、どうしてもっと柔らかい笑顔を返さなかったのだろうか？

どうして、もっとやさしい言葉をかけなかったのだろうか？

どうしていくつものチャンスを、見過ごしてしまったのだろうか？

どうして！

どうしてあの日、同じ電車に乗り込まなかったのだろう！？

叫びたい。

彼の名前を、

何度も、

何度でも、

叫びたい！

教職員専用のトイレの個室で、梓は壁に身体を預けて上を向いた。

この恋に気付いてから、初めて涙が頬を伝って流れた。
遅かれ早かれ、こういう時が来ることを、わかっていたではないか。

悠と、本当にどうにかなれるなんて、思っていたわけではなかっただろうが！

悠のいる世界に梓が踏み込んではいけないことを、気づかなかつたわけではないだろうが！

口紅のとれた唇を噛み締め、声を押し殺して泣き続ける梓は、唯一つの切ない想いを、永遠に封じ込めようと心に誓った。

それは、決して声にできなかった、一言。

あなたが、好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0094d/>

BlueWater ~ 惚れ薬 ~

2010年10月8日15時46分発行